

日本内科学会視聴、 運転免許証更新を経験して

三原内科クリニック 院長 喜久村 徳清



日本内科学会講演会は、今年4月15日より3日間ハイブリッド形式で行われた。2018年のノーベル生理学、医学賞受賞者、本庶佑先生の「がん免疫療法の未来」と題した特別講演が予定され、予告は1年程前よりあった。コロナ禍で会合や外出制限、マンネリ生活から脱出するような心境も手伝って、リモートで参会することにした。

リモート参加は診療所を数日間閉じ空路、京都まで行くわずらわしさが無い。旅の楽しさは味わえないものの、講演開始時刻に合わせて集まるあわただしさもなく、すきま時間に、自身のスケジュールにあわせて学会発表や講演を視聴できる。プログラムを見ながら気軽に指先でキーをクリックするだけでより多く入室できる気安さもあり、経験を重ねるごとに身につく。それに加えて、アーカイブ配信もあるのでより多くの演題、情報に接する機会があった。

本庶先生の特別講演は前日に本人の都合で中止となった。残念ながら先生が80才のご高齢でもあることを考慮するとやむをえない。

それでも未来に向かって現在進行中の研究を専門毎の研究統括者が、最前線の動画を含む多くの画像を用いて説明した三題のシンポジウムを視聴できたことは大きい。日頃、断片的に見るニュースの情報を1時間で解説風に話されたので分かり易く、充分納得できた。

AIホスピタルは夢のような話だが、ウィズコロナの時代に人と接触せず、着衣のままXPも撮って、シャツ型ECGやホルターも実現している。ロボットは冷たいとみられがちだが受け入れられ、誘導案内は現実のものとなっている。医療機器の有効活用やスケジュール作成、そして効率化にAI技術が果たしている現状等、

慶大病院からの発表があった。

J-MID センター (Japan Medical Image Database) は2018年に7大学の共同運営で発足し、放射線画像のビッグデータ処理に向けて整備が着々と進められている。

ゲノム医療におけるAI研究では、欧米に比べて4倍も高率に発生する喫煙者の小細胞肺癌の研究成果がある。無人クリニック開発等を必要としている人達に提供する話もあった。

また、COVID-19の現状に関して、岡部信彦先生の解り易いご講演がありました。この10年で医療の薬は100倍に、知識は1000倍に増えて加速度的に医療分野の進歩も実現しているという発表に同感する部分も多くありました。

話は変わりますが、私の免許証切り替えの経験です。2017年3月施行の改正道路交通法は75才以上の高齢者に認知機能検査を義務づけ、認知症の診療現場は少なからず混乱した。19年3月は私が、丁度75才になった年で、その前年から認知機能検査講習実施の案内状が届き、(その自覚は念頭に全くなかったため)大いに反発した。そのうち諦めて予約の電話を入れると3ヵ月待ちと言われて大慌て。検査官も不慣れで緊張した様子で、その分厳しく、また視力検査も動体視力、視野検査等と時間がかかった記憶がある。

今年3月の誕生月には、2回目となる後期高齢者講習会を受け免許証を更新した。講師も時代を反映してか様変わり、『皆さんは50年も運転をしてきたベテラン運転手。講習会というほどのことはないが、決まりなので話します。まず、視力の低下には眼鏡を変え、視野が狭くなったら首を回して見、動体視力の衰えにはスピー

ドを落として対処する。次回は3年後にベテラン講習会を受けて下さい。そのためには健康でいることが大切。私が首にならないかぎりには又、ここでお会いしましょう』と妙に励まされてしまいました。日頃、医者（私）が話していることを道路交通課の職員から拝聴することになろうとは思ってもよらなかった。

近年、自動運転機器の開発はめざましい進歩を遂げ、現在でも車庫入れ、危険予知自動停止機能のついた車はあるが、さらに信頼性を増した車種が主流となるにちがいない。運転技術の稚拙さを問わない時代も夢ではないと思う。私の3年後のベテラン運転講習会もさらにやさしいものになる、いやそれどころか、社会全体が第5次産業革命、持続可能な開発目標 SDGs、人口減少社会といわれている時代のなかで、人を大切にする風潮がさらに進んでいる。

今年5月15日は本土復帰50周年記念日にあたり、年間を通じて賑わっている。30年前は（1992年、丁度復帰20周年にあたり）首里城が再建され、暮れに完成した年でもあった。が、たまたま三原内科クリニックを皆様のおかげで開院することができた年でもある。その後、首里城の10周年記、20周年記はクリニックのそれであり、私は首里城とともに年を重ねたという感覚があった。

それが令和元年10月31日未明、何の前ぶれもなく茜色の炎となって炎上、焼失してしまった。

信じられない衝撃的な光景は焼け跡を生々しく残して、寂しい限りである。私は乗り越えて、クリニックでの診療を今後とも続けていきたいと考えている。今となっては開院式は懐かしい出来事の一つとなって初心を思い出させてくれる（写真1,2）。

生き永らえていることに感謝をしながら、これからよろしくとご挨拶申し上げたい。



写真1 三原内科クリニック開院式のセレモニー、テープカット（平成4年5月）



写真2 左より、稲福、柊山、私、比嘉、平田（故）、司会は安次嶺の各氏（敬称割愛）